

WRITING の授業における自由英作文評価とポートフォリオ評価

1 はじめに

生徒の実践的コミュニケーション能力を育成するためには、3年間にわたる継続的な指導が必要である。本校では、1年次のオーラルコミュニケーション（OC）の授業で、日常生活の場面に応じた会話活動や問題解決のタスク活動など、「話す活動」を中心としたコミュニケーション活動を導入している。2年次のライティングの授業では、1年次のOCの授業をさらに発展させ、「書く活動」と「話す活動」を統合したアプローチに基づき、身近な話題について自分の考えを書き、書いたことに基づいて会話をするという活動を繰り返し行うコミュニカティブ・ライティングに取り組んでいる。この授業は、コミュニカティブという観点から整理すると、次のような特徴がある。

(1) インターアクティブ (interactive) な活動である。

「書く活動」と「話す活動」では、常に、読み手（クラスメート）や聞き手（クラスメート）が存在している。つまり、伝える相手があり、伝える内容があり、相手から内容に関するフィードバックがあるインターアクティブなコミュニケーション活動になっている。

(2) 流暢さ (fluency) を重視する。

言語的正確さではなく、内容の伝達を重視する。はじめから、言語的正確さを追求しすぎると、英語で表現したいという意欲を高めることが難しくなってくる。まず、英語で自分の考えを書くことに慣れ、できるだけ多くの英文を書くことを目標にする。相互訂正 (peer-editing) では、誤りの訂正よりも内容面でのフィードバックを重視する。誤りの訂正については、いつ、どこまで訂正するのかということが問題になるが、これは学習者の学習到達段階による。何度か書き直しをして伝えたい内容がまとまった段階で、よくある誤り (common mistakes) をクラスで紹介し、言語面の誤りに注目させるという方法や、書き直しをしていく段階で、教員が重点項目の誤りを指摘するという方法がある。いずれにせよ、初期の段階では、間違いを全て訂正することより、内容を膨らませることに重点を置きたい。

(3) 書く過程 (process) を重視する。

できあがった自由英作文の作品だけでなく、書く過程を重視する。具体的には、あるトピックについての自由英作文の作品ができあがるまでに、次のような活動をする。

- ・ 書く前に、トピックについて短い会話をする。
- ・ 短い会話を基に、トピックについて10文ほどの英作文を書く。
- ・ Peer-editing で、友達の書いた英作文を読み、誤りを訂正したり内容についてコメントを加えたりする。
- ・ 友達のコメントを参考に何度か書き直しをする。
- ・ 相手を替えながら書いたものに基づいて会話活動 (Timed-conversation) をして、自分の考えを広げていく。
- ・ Common mistakes に照らし合わせ、誤りを訂正する。
- ・ イラストや写真を添え、15文程度の英作文作品 (fun-essay) を仕上げる。

2 ライティングの授業と評価をする際の配慮事項

2-1 授業の具体的到達目標

今年度のライティングの目的は、日常的な話題について、自分の考えを会話や英作文で表現できるようなコミュニケーション能力の育成である。自己紹介、スポーツ、旅行、尊敬する人などをトピックとして、自由英作文活動と会話活動を繰り返し行う。クラスは週2回で、人数は17-21人の分割授業である。この授業の具体的到達目標は以下の通りである。

- | |
|--|
| <p>(1) 日常的な話題について、自分の考えを15－20文で書けるようにする。</p> <p>(2) 日常的な話題について、3－4分の即興性のある自然な会話ができるようにする。</p> <p>(3) 主体的に学ぶ態度を身に付け、進んで英語学習に取り組めるようにする。</p> |
|--|

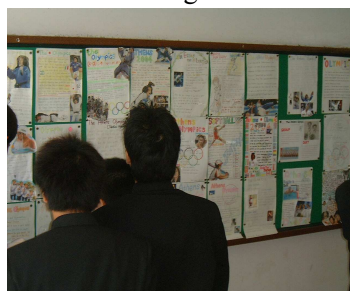
2-2 授業の流れ

1つのトピックにおける授業の流れは以下の通りである。(ワークシート参照)

- (1) **Warm-up**: ブレインストーミング、モデル会話、リスニング活動。
- (2) **Conversation Strategies**: 会話における聞き返し、相づち、間の取り方などの表現を Conversation Strategies として、トピックごとに2－3個導入し、練習する。
- (3) **Three Questions**: トピックに関する3つの質問をペアワークで導入し、それぞれの答えを1文で書く。
- (4) **Writing assignment**:
 - ① What you want to say: Three questions を膨らませて、自分の考えを10－15文ほど書く。
 - ② New Vocabulary: 自分の考えを書くときに、調べた単語を書き出す。
 - ③ Three new questions: そのトピックについて3つ関連する質問を考える。
- (5) **Peer-editing**: ペア、または小グループで、お互い書いた英作文を読み、文法的誤りのチェックや内容についてのコメントを交換する。
- (6) **Timed-conversation**: ライティング課題に基づき、新しく学習した Conversation Strategies を実際に使いながら、ペアを替えて3－4分の会話を4回繰り返す。会話の後、相手の話の内容を2分で書き留める。
- (7) **Recording**: もう一度新たなペアで、3－4分の会話をを行い、カセットテープに録音する。
- (8) **Self-assessment**: 録音された会話を聞き、自己評価をする。会話の内容を全て書き取り、良かった所、悪かった所を振り返り、次回の目標を設定する。文法的な誤りを3つ正し、会話のパートナーの評価もする。
- (9) **Common mistakes**: 間違いやすい表現を取り上げ、学習する。その後、self-editing をして提出し、教員が英文をチェックする。
- (10) **Fun-essay**: Timed conversation や peer-editing でさらに書きたいことが増えてきたら、文を書き加えたり、写真やイラストを添えたりして、廊下に掲示できる作品に仕上げる。自由英作文の作品だが、イラストなどを加えて楽しく取り組んでほしいため、fun essay と呼んでいる。



Recording



Fun essay

2-3 評価

複数の評価方法を取り入れ、授業内のコミュニケーション活動を評価する。

<評価方法>

- (1) **定期テスト**: 年に4回、定期テストを実施する。定期テストでは、授業で取り扱った活動を反映した問題を作成する。会話文のリスニング問題、会話文の空所補充問題、誤りの訂正問題、10文程度の自由英作文問題など、授業内の活動をテスト問題に反映させる。
- (2) **自由英作文の作品**: トピックの最後に仕上げる自由英作文の作品を評価する。年7回。
- (3) **スピーキングテスト**: 年に3回、授業で扱ったトピックについて speaking test を実施する。形

式は生徒同士の会話である。その場でくじを引き、トピックと会話の相手が決まる半即興的な会話テストで、スクリプトに基づいたものではない。

(4) **録音した会話の自己評価:** 録音した会話の内容をすべて書き出し自己評価をして、次の会話の目標を設定する。

(5) **ポートフォリオ:** 年に3回、自己の学習過程を振り返り自己評価をする。課題、提出物、ワークシートなどは、すべてファイルに綴じてあるので、何度か書き改めた英作文や録音した会話のスクリプトなどを見直し、「書く活動」や「話す活動」で、どんなことができるようになったか、どんな学習方法を発見したのか、これからの目標は何かということについて、自己評価レポートを書く。

<評価における工夫>

- (1) 「話す活動」と「書く活動」を有機的に結び付けているため、ライティングの授業ではあるが、スピーキングテストを実施する。スピーキングテストは、授業内の会話活動に基づいたテストとする。また、定期テストでは、授業内の会話活動に基づいたリスニング問題を出題する。
- (2) スピーキングテストは、生徒の会話をビデオ録画し、テスト実施後にビデオを見て評価する。評価に客観性をもたせるため、録画した会話を何組か抽出し、授業担当者全員で採点をして基準について話し合った後、担当者が各自採点を行う。
- (3) スピーキングテストや自由英作文の評価規準は、単元の指導目標に照らし合わせて、具体的に記述する形で設定する。評価規準は、生徒に事前に知らせ、目標を持たせる。
- (4) 自由英作文の作品を廊下に掲示し、自分のクラスだけでなく、他クラスの友達の作品も読むことができるようにする。学年全員で、お互いの作品を鑑賞する環境をつくり、英作文作品に取り組む意欲を高める。
- (5) ポートフォリオによる自己評価レポートのコメントを集め、クラスで紹介して、学習過程を共有する。

3 自由英作文 (fun essay) の作品評価

トピックについて「書く活動」と「話す活動」を繰り返し行い、peer-editingを通して、何度か英文を書き加えたり書き改めたりした。年間を通して、7つのトピックと、各トピックに関する自由英作文 (fun-essay) の作品に取り組み、その作品を評価した。

<トピック例>

Topic 1	Three Things about Me!	Topic 2	My Favorite Stories
Topic 3	The Olympics Part 1	Topic 4	The Olympics Part 2
Topic 5	My Home Town	Topic 6	The School Trip to Okinawa
Topic 7	People I Admire		

<観点別評価>

- ・ 関心・意欲・態度
写真やイラストなどの非言語手段を用い、相手に自分の考えを伝える工夫をしているか。
間違いを恐れずに、たくさん書こうとしているか。
- ・ 表現の能力
自分の考えをわかりやすく相手に伝えているか。
内容を整理し、適切な分量で書いているか。
- ・ 言語・知識の能力
基本的な語彙表現を身に付けているか。

<fun essay 評価項目と配点>

(1) 評価項目は、Length(長さ)Contents(内容)Design(デザイン)の3項目を設定し、分析的採点法を用いた。

- ・ Length (長さ) は、生徒が理解しやすいように文の数で表し、トピックが進むにつれて、基準の文の数を増やしていった。
- ・ 3つの評価項目の中でどれか1つ非常に優れているものがあれば、ボーナス点1点を与えることとし、生徒の意欲を高める工夫をした。
- ・ fun-essay の作品評価には、文法を評価項目に含めなかった。誤りを恐れずに、多くの英文を書くことを重視したからである。ただし、定期テストの自由英作文問題では、Design (デザイン) の代わりに、Grammar(文法)を評価項目に取り入れ、文法面での定着度を評価した。
(言語・知識の能力の評価)

(2) 生徒の学習段階に応じて指導目標と評価項目の配点を変えた。

	Length 長さ	Contents 内容	Design デザイン	Bonus ボーナス	Sum 合計
Topic 1	3	3	3	1	10
Topic 2	3	3	3	1	10
Topic 3,4	3	3	3	1	10
Topic 5	4	3	2	1	10
Topic 6	4	3	2	1	10
Topic 7	3	4	2	1	10

- ・ Topic 1 から Topic 4 では、英文を書くことが苦手な生徒でも、「デザイン」の分野で頑張ると得点できるように、他の評価項目との重み付けを同等にした。
- ・ Topic 5 から Topic 6 では、英文を多く書くことを重視し「長さ」の配点を4点とした。
- ・ Topic 7 では、伝える内容を重視し、「内容」の配点を4点とした。また、「長さ」では、5語以上の文を1文と数えるという語数制限を加えた。

(3) 評価規準は具体的な記述で提示した。

- ・ Topic 1 では、内容を good、fair、poor で評価したが、どのような内容を書いたら good と評価されるのか生徒には理解しづらいようだったので、Topic 2 からは、具体的な記述をして、生徒が規準を理解しやすいように工夫した。

<Fun Essay 評価規準例>

(例) Topic 2 My favorite stories

A=3点 B=2点 C=1点 Bonus 1点 合計10点

1. Length (英文の長さ)

- A 12文以上書いてある。
- B 10-11文書いてある。
- C 9文書いてある。

2. Content (内容)

- A タイトルやジャンル、登場人物の名前が書いてある。あらすじや、なぜこの話が好きなのかというコメントが詳しく書いてある。興味深い内容である。
- B タイトルやジャンル、登場人物の名前が書いてある。簡単なあらすじ、または簡単なコメントが書いてある。
- C タイトルやジャンル、登場人物の名前が書いてある。

3. Design (デザイン)

- A 何色かの色が使っている。イラストまたは写真が貼ってあり、読んでみようという気持ちにさせる魅力的なデザインである。
- B 何色かの色が使っている。イラストまたは写真が貼ってある。
- C イラストまたは写真が貼っていない。英文だけである。

4. Bonus (ボーナス)

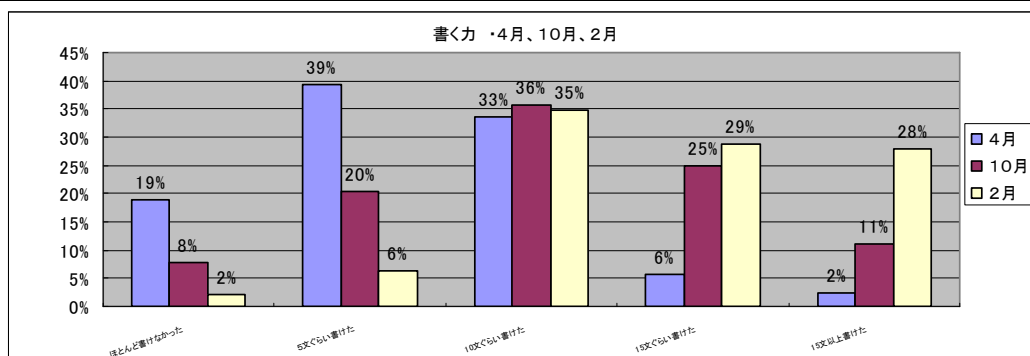
1-3の評価項目の中で、Aを超える素晴らしいものがあれば、ボーナスポイントを与える。

<生徒のアンケート結果>

年に3回、生徒の意識調査アンケートを行った。

・「書く力」について、あなたはあつピックについてどのくらい書けますか。

	ほとんど書けない	5文ぐらい書ける	10文ぐらい書ける	15文ぐらい書ける	15文以上書ける
4月	19%	39%	33%	6%	2%
10月	8%	20%	36%	25%	11%
2月	2%	6%	35%	29%	28%



- ・ 4月に「ほとんど書けない」という生徒は19%いたが、2月には2%に減った。
- ・ 4月に「5文ぐらいしか書けない」という生徒は39%いたが、2月には6%に減った。
- ・ 4月に「15文ぐらい書ける」という生徒は6%しかいなかったが、2月には29%に増えた。
- ・ 4月に「15文以上書ける」という生徒は2%しかいなかったが、2月には28%に増えた。

4. ポートフォリオ評価による自由英作文活動の自己評価

年に3回、ファイルに綴じてあるワークシートを見直して、どんなことができるようになったのか自己の学習過程を振り返り、自己評価レポートを作成した。「書く活動」に関しての生徒のコメントは次の通りである。

<Peer-editing>

- ・ 友達に読んでもらうので、どこに興味をもってもらえたのかわかるし、自分では気づかない質問をしてもらえるので、書く内容を考えるのに必要だ。
- ・ 友達の英作文を読めるので、何を書いてよいのかわからないときなど、すごくヒントをもらっている。友達のいろんな文を読めたことがよかった。
- ・ どう表現していいのかわからないとき、「こうしたらどう？」と sharing の活動でアドバイスをもらって、すごく助かった。
- ・ 自分が書いた英作文に友達のコメントやアドバイスがあると、自分で気づかなかった文法の違いに気づくことができるし、書き加えることがどんどん増えていき、とてもやりがいがあった。繰り返し書くことは、大切だと思った。
- ・ よい表現があれば、友達の英作文から自分の英作文に取り入れた。新しい表現も学ぶことができた。友達の表現はすごい。
- ・ 自分の伝えたいことを、わかりやすくどのように伝えるかということを考えながら、何度も書き直すことによって、新しい単語や文法が自然に身に付いた。

<Fun-essay>

- ・ Fun-essay は、自分らしさを出せるので、とてもよかった。スピーキングテストでは上手く言えなくても、エッセイでは伝えたいことを全部書けるように努力した。
- ・ 写真を貼ったり、イラストを描いたりして、作品を仕上げることはすごく楽しかった。友達の作品を読むことも、毎回楽しみにしていた。
- ・ 友達の作品を読んでいるうちに、長い文のエッセイも読めるようになってきたし、自分もよいエッセイを書こうと頑張れた。何時間もかけてエッセイを仕上げた。修学旅行についてのエッセイの時に、初めて20文以上書くことができ、伝えたいと思ったことも書けたと思うので嬉しかった。

<Timed-conversation>

- ・ 友達と会話をすることによって、自然に英語が出てきて、「あっ！これを書けばいいや！」って思うことを何回も繰り返して、会話の後に、書く文を増やしていった。
- ・ 友達の話す英語は、とても勉強になる。カッコいい表現とか使えるものがあったら真似して使ったり書いたりした。
- ・ 友達の意見が聞けてすごくよかった。自分の考えも広がっていったと思う。
- ・ 会話のときに英語で話すことができるように、英作文の宿題は必ずやった。辞書で単語を調べたり、言いたいことを書いたりしておかないと、会話ができないから。

<その他>

- ・ 1年生の時や英語Ⅱでは引いたことがなかった辞書だが、エッセイを書くために、辞書で単語を調べまくった。
- ・ 何度も書き改めるうちに、辞書を引く回数が多くなった。だんだん、辞書の例文を利用して、英文が書けるようになってきた。
- ・ 自分のことを書いているので、単語も知らないうちに楽しく覚えることができた。
- ・ 4月のころに比べて、英語で書いていくうちにだんだん考えが広がっていくようになり、トピックについてたくさん書けるようになってきた。
- ・ 最初は、何を書いていいのかわからなかったけど、自分で言いたいことを英語でまとめて書くこ

とがとても好きになった。

- ・ もっと文法を勉強して詳しく書けるようになりたい。

5. まとめ

- ・ 自由英作文の作品評価を1年間継続して行ってきたが、指導目標に照らし合わせて評価規準を毎回設定してきたので、生徒は段階を追って努力していくことができた。
- ・ 授業での英作文活動がそのまま評価されるので、生徒は授業に積極的に取り組むようになった。
- ・ 定期考査の自由英作文問題と異なり、時間制限がなく辞書も使用できるので、英語の苦手な生徒も1年間継続的に努力できた。
- ・ 評価規準を記述した rubric を作成することにより、どの項目をどれだけ努力すればよいのか、生徒にわかりやすく示すことができた。
- ・ 評価規準を記述した rubric を作成することにより、担当者間の評価の揺れをできるだけ小さくした。
- ・ 担当者会議で、指導目標を確認しながら毎回作成したが、rubric を作成しながら担当者間で指導目標を共有することができ、協力して教材を開発していく雰囲気生まれた。
- ・ ポートフォリオを用いて自己評価レポートを書くことにより、生徒はどんなことができるようになったのか自分で気づくことができ、生徒は英語学習に対する自信をつけた。
- ・ 自己評価レポートを書くことにより、どんな学習法が自分の英語学習に役に立ったのかを見つけることができ、英語学習に主体的に取り組むようになった。
- ・ 生徒の自己評価レポートから、教員は生徒の学習過程を学ぶことができ、授業改善に役立てることができた。
- ・ 評価規準の記述や尺度については、指導目標と照らし合わせて、さらに改善の余地がある。